

ミシガン州立大学での1年

宇都野 穰 極限重原子核研究グループ

留学というのは、原研に入所してしばらくから頭の中にちらちらしていましたが、英語もそれほど得意でないため異国で長期間暮らすイメージが頭の中で描けず、何となく躊躇していました。周りの人が留学などして、何となく外堀が埋められた気がして英語の勉強をし出しているうちに、急にアメリカという国にも興味が湧き（英語の教材というのはそうなるよううまく作られています）、せっかくの1年なので肌でアメリカを吸収しようと思って留学先のミシガン州立大学国立超伝導加速器研究所(NSCL)に向かいました。

NSCLは、アメリカ国立科学財団(NSF)が出資している国立研究所にも関わらず州立大学の中にあるという風変わった形態になっており、原子核科学に特化しながら合計300人ものメンバーからなる大きな研究所です。アメリカにはアルゴンヌ、オークリッジなど原子核科学研究を行っている研究所が他にも多くありますが、NSCLの特徴は、大学内にあり教授陣の多くが大学で教鞭を執っているため学生が多いこと（全米の原子核科学のPh. Dの約10%を占める）、他のエネルギー省(DOE)研究所とは異なり誰でも簡単に研究所にアクセスできるオープンなところなどが挙げられ、これらが独自の活気の源となっているように思われます。

実際にこちらで研究を進めると、日本とアメリカのスタンスの違いをよく感じます。こちらで研究員をしている日本の方と話をするとよくその話題で盛り上がるのですが、結局プロフェッショナルに対する意識が「ビジネスマンか職人か」ということになるのだと思います。すなわち、一般にアメリカ人の研究者は、スポンサーの要求していることを忠実に遂行することを使命として認識しているように思われます。予算が獲得できる研究をする、その中でいかに多く論文を生産するかということが非常に徹底しています。私はここでなされた実験の論文の理論の部分を担当することが多いのですが、彼らはデータの新規性などが十分でないような場合でもほとんど必ず論文にします。現時点のベストであるのだから論文にすべし、という思想だそうで、これは私が今まで持ったことがない視点でした。日本の研究者は一般



に細部まで緻密に仕上げることを得意とし、スペシャリストとして世界最高の腕を持っていることがしばしばあります。一方、自分の守備範囲を固定させてしまうこともまま見られ、人材、資源をニーズに応じて動的に配置するアメリカと対照的です。金融大国のアメリカとものづくりの日本という社会の構図の縮図といったところでしょうか。

こちらの秋はフットボール一色になります。キャンパス内に8万人収容のスタジアムがあるのですが（市の人口よりも多い!）、試合のある土曜日となると四方から人がやって来てこちらでは滅多に見られない渋滞が発生します。宿敵のミシガン大学との対戦になると盛り上がりは最高潮を迎え、教授などによれば、その試合にさえ勝てば他は全て負けてもいいくらいのものでそうです。今年は終了の数分前までリードしており、何年かぶりにライバルに勝てるかと思ったのですが、土壇場で逆転負けを喫してしまいました。翌日のキャンパスの散らかり具合がこの住民のショックを物語っていました。私はほぼ毎試合テレビもしくはスタジアムで試合を見たためか、11月半ばに全日程が終わった時、来年はもう見られないのだなど少し寂しい思いがこみ上げてきました。

以上、思うがままに書いてきましたが、この文が今後海外留学を考えている人に少しでも役に立てるのなら幸いです。最後になりましたが、快く送り出してくれたグループの皆さん等関係者の方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。